

数字が語る 日本の教育

いじめ目撃時の対応

いじめが社会問題化しているが、目撃した際、当の児童・生徒はどのような対応を取るか。

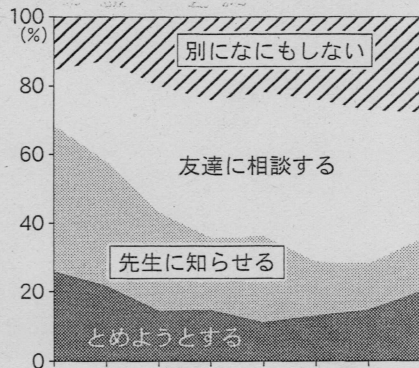
グラフによると、「とめさせる」「先生に相談する」という積極的な介入は学年が上がるにつれて減少し、友達に相談する（ひそひそ話をする）だけの者、何もしない者が増えてくる。下手に介入すると自分がターゲットになる、という恐れからだろう。

いじめとは被害者と加害者だけ

からなる現象ではない。周囲でもてはやす観衆、ただ見ているだけの傍観者をも含む、学級全体の「集団現象」と見なければならない。量的に多いのは最後の傍観者であるが、この層をいかにして仲裁者（いじめを抑止する者）、ないしは申告者に変えるかが重要となる。匿名のアンケートを定期的に行うのもいいが、いじめを許容しない雰囲気全体に行きわたるような学級経営を、日頃から心掛けたい。

いじめのささいな動機など、集団の力によって簡単に押しつぶされる。どの問題行動もそうだが、

いじめを目撃したとき、どうするか



小5 小6 中1 中2 中3 高1 高2 高3
資料：厚労省「全国家庭児童調査」（平成21年度）

とりわけいじめは、集団の力（皆の力）で抑止されるべきものである。被害者と加害者だけの問題と捉えてはなるまい。

（舞田敏彦・教育社会学者）